

家畜には捨てるものがない モンゴルの「獣糞利用術」

肉食文化というのは、単に肉を食べるか食べないかといった問題にとどまらず、思想や神話、絵画や衣料、はては家畜の排泄物の利用にいたるまで、人間と家畜とのありとあらゆるかわり方にまでおよぶものであることはいうまでもない。

その一例として、世界でも代表的な遊牧民族といわれてきたモンゴル人の場合をみてみると、森林というものがほとんどないモンゴル草原では、牛や馬や羊の乾燥糞は文字通りの貴重な燃料資源。驚くほど巧みに利用されてきた。

というのも、百%草食で生きている草原動物の糞は、それ自体がボール紙のかたまりのようなものといってよい。モンゴル人たちがこれを活用することを学ばなかったとしたら、むしろ不思議なくらいである。事実、彼らは、みごとに「獣糞文化」をつくり上げてきたのである。

まずさいしょに馬糞だが、馬は草の食はみ方が大まかで、咀嚼そしやくも粗いため、馬糞はさながら草だんごのようなみてくれを呈する。このため火つきは簡単だが、火持ちはあつがなく、火力も弱い。つぎに牛は、よく反芻はんすうするので、糞も繊維の細かいものとなり、火をつけると、柔らかく明るい炎を上げる。

ミート de meet

年をとったらお肉を食べよう

「年をとったら肉を食べてはいけない」という人がいます。しかし、最近の調べでは、動物性たんぱく質の摂取量が多いほど長生きするという結果がでています。年をとったらむしろ肉を摂るべきです。豚肉には疲労回復などに効果的なビタミンB1が多く含まれ、元気の元になり、沖縄の長寿の源といわれています。一日当たり百8を理想摂取量とし、元気な高齢者を目指しましょう。

ついで羊や山羊の糞は、豆粒のようにポロポロ。このままではどうにもならないので、秋から春先にかけての宿营地では、夜間、彼らを囲いの中に入れ、自分たちが排泄したものを自分たちの足でせつせと踏みつけさせる。

糞と尿が適度にふみ固められ、それが十センチぐらいの厚さになると、これを舗道の敷石ほどの大きさに切り取って乾燥させる。この糞板(?)は、さらに囲いの周囲に積んで乾燥させ、それ自体がまた囲いの補強材ともなる。

この羊糞(フルツン)は、草の繊維が圧縮されたものだからビート(泥炭)と同じ組成で、火力も強く火持ちもよい。ゲル(包)の中での調理、暖房、照明をかねた最良の燃料となる。これらの燃料を利用するにあたっては、まずフルツンを適当な大きさにくだいて五徳の内側に積み、上段に牛糞を並べ、その中央に少しくぼみをつくり、火付け用に馬糞をもみほぐしたものを一握りほど置く。あと、マッチで火をつける。やがて、鍋の中でマトンが静かに湯気を上げ、蒙古草原にそこはかかない詩情がかもし出されてゆく。